

大阪キリスト教短期大学における「幼児音楽系プログラム」について

発足からの歩みと今後の展望

山岸 徹、川畑尚子、迫田リツコ

1. はじめに

本学幼児教育学科における「幼児音楽系プログラム」は、平成 25 年度入学生より発足した。同時に発足した「国際教育系プログラム」とともに、同学科の教育内容に特色を持たせることを目的として開設された正課授業の集合体である。これらのプログラムを履修する学生は、他の学生よりも多くの授業を履修することとなる。

「幼児音楽系プログラム」は、本学の「カリキュラム・ポリシー＝幼児音楽系プログラム＝」にも記載されているように、「豊かな音楽観を持ち、幼児教育に音楽を生かすことのできる創造性ある人材の育成」（注 1）を目指している。内容的には、合唱や合奏などのアンサンブルに重点を置き、音楽を通じた心の交流によって人間としての成長を目指すということである。また、実際面においては、音楽発表会（以下、「発表会」と略す）を開催することを具体的なテーマとする。

本稿執筆時においては、実際に「幼児音楽系プログラム」の学生を受け入れ、教育活動を開始してからすでに 4 年目の段階に入っている。本稿では、執筆時点までの「幼児音楽系プログラム」の教育活動の経緯、および今後も同プログラムの教育活動をさらに進めてゆくにあたっての展望について報告する。なお本稿は「幼児音楽系プログラム」における授業科目を担当する山岸、川畑、迫田の 3 名による共同執筆である。

2. 「幼児音楽系プログラム」の発足の経緯と趣旨

本学幼児教育学科において、平成 22 年度後半より本学科の将来構想について、より魅力ある内容にするための検討が開始された。以後、毎月の学科協議会で詳細にわたる検討がなされた。その結果として「幼児音楽系プログラム」の名称で「国際教育系プログラム」とともに、平成 25 年度入学生より選択授業の集合体として発足することとなった。

「幼児音楽系プログラム」発足以前は、音楽関係科目としては、「器楽Ⅰ」、「声楽Ⅰ」、「音楽理論」、「子どもと音楽表現」（以上、1 年次開講科目）、「器楽Ⅱ」、「声楽Ⅱ」、「音楽理論特講（伴奏付基礎）」（以上、2 年次開講科目）があった。「器楽Ⅰ」と「器楽Ⅱ」は、内容としてはピアノ奏法の指導に特化していることから、これらの諸科目によってピアノ、

歌、音楽理論、音楽表現といった音楽の諸活動がバランス良く配置されていた。しかし、一方で、日頃授業を実施する中で、より保育に特化し、実践につながるような授業の必要性も考えられていた。

保育の現場では、日常の保育活動とともに生活発表会やお誕生会などの諸行事で音楽を取り入れている場合が多く、音楽が重要な要素となっている。本学で実施されている従来の授業では、おもに楽譜の読み方、ピアノの弾き方、声の出し方、こどもの歌の歌い方などといった、個人の基礎技術を指導することに重点が置かれており、保育現場で実際に行われている合唱や合奏といったアンサンブル活動の体験という側面が不十分であったのではないかと考えられた。そのようなことを鑑み、「幼児音楽系プログラム」においては、アンサンブルをする機会を設けることに主眼を置いた。そのような活動の中で、保育で使用する楽器にも触れて演奏したり、歌ったりすることで、学生自身が音楽により親しみ、楽しむ体験をすることを目指した。その一環として発表会（資料 1）を開催することを具体的なテーマとした。そのような活動を通して、将来保育現場に立った時に、音楽活動において主導的な役割を担える人材を育成するというを最終的な到達目標とした。

3. 「幼児音楽系プログラム」の選択の方法

「幼児音楽系プログラム」の選択については「国際教育系プログラム」とともに本人の希望により選択できる方法をとっている。選択にあたっては、本人の音楽的な力量などによる選考は実施していない。音楽が好きであるということを前提として提示し、音楽に興味がある学生は誰でも選択することが可能であることとした。

実際には、毎年入学試験の直後に実施される合格者を対象とした「入学準備説明会」において希望者を募集する形式をとっている。選択学生の人数は、平成 25 年度入学生では 17 名、同 26 年度入学生では 22 名、同 27 年度では 35 名、同 28 年度入学生では 31 名であった。また、それぞれの年度における幼児教育学科入学者全員に対する割合は、平成 25 年度入学生では 9%、同 26 年度入学生では 12%、同 27 年度では 18%、同 28 年度入学生では 15%であった（注 2）。

入学後は、クラス編成やゼミ構成において、選択者がまとまって各授業を履修できるように配慮されている。

4. 「幼児音楽系プログラム」選択者の履修科目

表 1 は、本学幼児教育学科で平成 28 年度において開講されている音楽関係授業科目の一覧である。これらの授業科目のうち「幼児音楽Ⅰ」、「幼児音楽Ⅱ」、「公開演奏」の 3 科目は「幼児音楽系プログラム」選択者のみが受講できるものである。また、それらに「器

楽Ⅰ」、「声楽Ⅰ」、「音楽理論」、「音楽理論Ⅱ（伴奏付特講）」の4科目を加えた合計7科目を「幼児音楽系プログラム」選択者の必修科目としている。

ただし、「幼児音楽系プログラム」選択者も2年間の教育課程で幼稚園教諭2種免許状と保育士資格の取得が可能である。

表1：大阪キリスト教短期大学幼児教育学科 音楽関係授業科目（平成28年度）（注3）

	科 目	単 位	開 講 時 期				幼児音楽系 プログラム必修
			1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	
全 員 が 履 修 で き る 科 目	声 楽 Ⅰ	2	●	●			●
	器 楽 Ⅰ	2	●	●			●
	声 楽 Ⅱ	2			●	●	
	器 楽 Ⅱ	2			●	●	
	音 楽 理 論	2		●			●
	音 楽 理 論 Ⅱ (伴 奏 付 特 講)	2			●		●
	子 ども と 音 楽 表 現	2	●1年前期または、 後期				
幼 児 音 楽 系	幼 児 音 楽 Ⅰ	2		●			●
	幼 児 音 楽 Ⅱ	2			●	●	●
	公 開 演 奏	2				●	●

幼児音楽系プログラム科目の授業は1年次後期から開始される。それまでの間は、山岸・川畑の教員2名がゼミ活動の一環として音楽に関する取り組みを行っている。

「幼児音楽系プログラム」選択者のみが受講できる3科目の「授業のねらいと概要」は、以下のとおりである。これらは、3科目に共通する。

表2：「幼児音楽Ⅰ」、「幼児音楽Ⅱ」、「公開演奏」3科目共通にする「授業のねらいと概要」

幼児音楽系プログラム科目として、同様の他の2科目と密接に関連し、音楽発表会開催を共通の目標とした一貫した内容の一部を担うものである。

豊かな音楽観を持ち、幼児教育に音楽を生かすことのできる創造性を有する保育者を育成することを目的とする。チームワークを大切に円滑に計画を進め綿密に準備することにより、音楽発表会を成功に導くことのできる方法を身につける。（注4）

一方、上記 3 科目の「内容」と「授業終了時の達成（到達）目標」は、それぞれ以下のとおりである。

表 3：「幼児音楽Ⅰ」の「内容」と「授業終了時の達成（到達）目標」（注 5）

	[内容]	[授業終了時の達成（到達目標）]
幼児音楽Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の基礎練習、発声の基礎 ・歌唱練習、合唱、合奏練習 ・ピアノ連弾 ・音楽発表会の企画 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育現場に入った時、よりスムーズに音楽活動が行えるようになる。 ・歌唱、合奏、連弾の基礎力が身につく。 ・保育現場における音楽発表会に向けた企画をし、実行する力が身につく。
幼児音楽Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽発表会の企画確認 ・各楽曲の練習 ・音楽発表会に向けた準備、リハーサル 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育現場に入った時、よりスムーズに音楽活動が行えるようになる。 ・歌唱、合奏、及びそれらを組み合わせた創作的表現の基礎力が身につく。 ・「幼児音楽Ⅰ」で習得した内容をさらに発展させ、より充実した音楽表現力が身につく。 ・保育現場における音楽発表会に向けた企画をし、実行する力が身につく。
公開演奏	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽発表会に向けた企画の確認と準備、事前練習 ・音楽発表会開催 ・事後のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育現場に入った時、よりスムーズに音楽活動が行えるようになる。 ・保育現場における音楽発表会に向けた企画をし、実行する力が身につく。

5. 「幼児音楽系プログラム」のこれまでの授業における指導の観点・留意点

担当教員としての指導の観点、留意点は以下のとおりである。

【全体的なこと】

- ・卒業後、就職して保育の現場に入った時、よりスムーズに音楽活動が行えるようになることを目指した。
- ・子どもと音楽活動を行う際、最も大切なことは、保育者自身が音楽を楽しむことである。そのためには、遊びの要素を取り入れることも大切であると考えた。

【幼児音楽Ⅰ】

この授業では、合唱と楽器合奏と発表会の企画を山岸が、基礎的トレーニングとピアノ連弾を川畑が担当した。連弾の指導が始まってからは、授業は 2 つの教室に分かれて同時進行で行った。一方で、合唱や合奏の指導を進めながら別教室で並行して連弾指導を進

める形で実施した。連弾の指導を受ける学生は、一組（2名）ずつ順次別教室に移動する。

<指導の観点・留意点>

- ・全体の基礎的トレーニングにおいては、リズムや音を使って遊びを取り入れた。具体的には、拍（音楽）に合わせて歩く、高い音が聞こえたらジャンプする、低い音が聞こえたらしゃがむなど、体を使って拍や音の高低を感じることを学生自らが体感した。
（この内容は、平成25年度、26年度において実施した。）
- ・合唱や合奏がスムーズに行えるよう、発声法や各楽器の奏法など、音楽の基礎力を身に付けた。
- ・ピアノの初見視奏、連弾など、音楽技能の向上を目指した。
- ・連弾では、クラシック曲、アニメ曲、ポップス曲など、幅広く学生一人ひとりが自分のピアノ演奏技術の進度に適した楽曲を選んだ。
- ・アンサンブルをするためには、リズムを正しく刻めることや拍（＝音楽）の流れにうまく乗ることが一人で演奏する時以上に重要である。そのことは、保育現場で子どもたちと一緒に歌ったり、子どもたちの歌に合わせてピアノを弾いたりすることにもつながるということを学生に理解させた。
- ・ピアノにおいては、ソナチネ程度の進度であっても、リズムを正しく刻めなかったり、拍を正しく理解していない学生が多かった。リズムを正しく理解させるよう心がけた。

【幼児音楽Ⅱ】

この授業は、「幼児音楽Ⅰ」に引き続き発表会に向けたプラン作りと各楽曲の練習がおもな内容であり、山岸が担当した。

<指導の観点・留意点>

- ・音楽発表会は、地域に開かれたものであるよう公開とし、地元の子どもたちを招待することとした。
- ・音楽発表会の企画にあたっては、選曲、全体の進め方など可能な限り学生の希望を優先した。ただし、自分たちだけが楽しむのではなく、来場者の子どもたちや保護者も一緒に楽しめるような内容にするよう、指導を心がけた。
- ・上記の目標を掲げたため、ただ楽曲を並べて演奏するというスタイルではなく、ドラマの要素を取り入れて全体が物語のように繋がって楽しく鑑賞できるような構成を企画した。
- ・学生がドラマの中のいろいろな役に扮し、セリフも入れて演技できるようにした。
- ・手遊び歌など、来場者の子どもたちや保護者も一緒に楽しめるコーナーを作った。
- ・使用する楽曲の合奏譜は山岸が作成した。鍵盤ハーモニカ、木琴、鉄琴、タンブリン、

カスタネット、太鼓、シンセサイザー、ピアノなど、保育の現場で用いる楽器をおもに使用したが、音域的に高音域の楽器が多いため、編曲の際には、キーボードやピアノが中低域の音を補う役割を果たすことになる。そのような特徴を生かした編曲の作業が重要である。なお、学生の中には楽器（フルート、クラリネット、サクソフォーン、トロンボーン、ユーフォoniumなど）を個人で所有している者も存在し、それらの楽器を加え、織り交ぜた編曲を取り入れた（楽譜資料1参照）。この編曲作業には、かなりの時間と労力を要したが、学生のモチベーションを高めることに繋がったと考えられる。

- ・各楽曲の練習と、ドラマとしての一連の練習を並行して行った。

【公開演奏】

この授業では2年間の成果である発表会に向けて、山岸、川畑、迫田3名の教員で学生を指導し、仕上げていった。

発表会の会場でもある講堂を使用し、本番での全体の流れを構想しながら授業を進めた。学生自身が気づいたことや教員から見て不十分と感じたところなどをお互いに提示し、学生と教員がともに自由にディスカッションする機会多かったが、そのことが完成度を高めるための重要な要素となった。

発表のプログラムについては「幼児音楽Ⅰ」、「幼児音楽Ⅱ」においてすでに話し合いが積み上げられてほぼ確定しており、この授業では最終的な仕上げの部分を担当した。

<指導の観点・留意点>

- ・本授業の開始当初において学生たちは、意欲はあるのだが発表会を作り上げてゆくための方法が分からず、演奏技術も足りない様子だった。そのような点について、側面からアドバイスするよう心がけた。
- ・学生の学びたい、成長したいという姿勢を大切にするよう心がけた。
- ・授業時においては、「通し稽古」が中心になっていたが、そのために途中で止めることができず、演技者にその都度注意をすることができなかった。そのようなことを補うために、授業以外の時間にも練習時間を持ったが、学生たちは熱心に参加していた。
- ・授業外の時間にも以下のような練習をした。この点は、おもに迫田が担当した。
 - ①一場面ずつ通して、まずは学生が歌や演技をした。
 - ②「駄目出し」(注意)をする。できない場合は何度でも上達するまで繰り返し練習した。
 - ③他の学生は全員で見ながらメモを取ったり、気付いた点を演技者にアドバイスしたりした。この点は、全員で見る事が大切である。見ているメンバーは、はじめは教員の助言を聞くだけだが、次第に教員の注意する点が予測できるようになり、演技者に対してアドバイスしたり、自分の演技に生かしたりできるようになった。

④学生には、まず舞台での立ち方や基本的な動き、体の向きなどを指導した。それらの基本が理解できていれば、各楽曲に応じた動きや表情なども指導しやすい。

- ・学生の思い入れは強いものの、楽曲の内容を正しく把握できておらず、どのように演出してよいか分からない様子が感じられることがあった。そのような場合には、まずそれぞれが受け持っている役柄について考えるように促した後、各役柄の性別・年齢・性格なども考慮して、それに合わせた姿勢、歩き方、動き方、反応の仕方、歌い方などを細かく指導した。
- ・ダンスの振り付けはよく考えられていたが、もともとダンスの素養が備わっている学生とそうでない学生との差がみられたので、可能な限り均一になるように指導を繰り返した。ダンスのおもな指導内容は、体の向きや角度をそろえる事、ターンなどのスピードをそろえる事、手や足の高さや向きをそろえる事、顔の向きをそろえる事、表情を基本的には明るくする事などであった。これらの事を徹底的に直すことによって、ダンスのクオリティーも高く見えるようになった。

6. 授業担当教員の感想

【迫田】＜発表会に向けて＞

- ・学生は自分たちで考えて練習している間は、少しできたらお互い満足するような様子だったが、指導が入り高いものを教員が求めると、みるみるうちに変化を見せていった。
- ・お互いの演奏やパフォーマンスを見る目が変わり、当初はただ褒め合っていたものも、さらに良くするためにはどうすれば良いかを考え、意見を出し合う事が出来るようになった。
- ・上述のようなことから学生一人ひとりの意識が高められ、何かを発表する際に必要な厳しき、真剣さ、お互いを本当に思いやり協力し合う心が養われたと思う。
- ・アニメの主題歌などを取り上げた部では、学生のアイデアが光っていた。
- ・それぞれに思い入れがあり、演出に工夫が見られた。
- ・こどもが喜ぶような振付や衣装など、良く考えられていた。
- ・アナウンスもこども向けのショーのような構成で、流れが良く飽きさせないものになっていた。

【川畑】＜連弾について＞

- ・受講人数が奇数だったため、ピアノ連弾を2曲担当する学生があった。3人で組むか、1人が2曲を担当するかたちになる。その都度学生の希望を聞いて決めたい。
- ・授業内で実施した連弾発表は、学生が二人ずつのペアとなり、共同してアンサンブルを仕上げ、ゆくという面で意義があった。

<公開演奏について>

- ・全体の流れをつかむことに時間が割かれ、個人指導の時間がとれなかった。
- ・発表会は、「幼児音楽系プログラム」選択者の1年生も加わって一緒にステージを作り上げていくよう企画しているが、1年生と2年生と一緒に練習できる授業がなく、ゼミ時間や発表会最終週の放課後を合同練習に充てた。そのようなことから学生の負担が大きかったと思われる。
- ・無事に発表会が終えられたこと、また学生主体に企画から発表までを経験できたことは大きな成果と考える。
- ・一方で、発表会の外部への案内方法など、今後の検討課題が残る。

【山岸】<難しかったことについて>

- ・当初、合唱をする際に、発声のトレーニングをする時間が十分にとれなかった。また、発声についての意識が全体にあまり高くなかった。こどもの歌を歌う時は、地声のような固い発声になりがちである。当初はプログラムに「ハレルヤ」を入れていたが、声をまとめるのが大変だった。
- ・第1回発表会を実施するのは、何もないところから作り上げるという点で大変だった。
- ・2年生がプランを作って1年生が協力するかたち。1年生も従うだけではなく、主体性や目的意識を持てるように指導を心がけた。1・2年生の学生間の協力体制作りが大切である。
- ・選曲については基本的に学生に任せているが、学生が思い描くイメージを実現するためには、それにふさわしく編曲された楽譜が必要である。ところが、市販されている楽譜は、編成が合わない、演奏効果が趣旨と異なるなどの理由で使用できない場合が多い。そもそも編曲楽譜が市販されていない場合も多い。一方で、編曲方法を学生に指導する授業が想定されていない現状のカリキュラムでは、編曲の作業まで学生が担当するのは難しい。そのような状況下で、今までのところ編曲の必要のある楽譜の作成作業には学生が関わらず、すべて教員（山岸）が担当し、かなりの労力を要することとなった。

7. 発表会に向けた担当教員と学生との役割分担

発表会を実現するためには、授業の内外において、様々な役割を教員と学生が分担し、協力して準備を進めてゆくことが大切である。また、そのことは学生が将来現場に出て保育者となった際にも必要なことである。そのようなことをふまえ、第3回発表会を控えた平成28年度においては、当初に担当教員と学生の役割分担を決め（表4）、それに従って計画を順次実行してゆくこととした。

表 4：発表会に向けた準備の役割分担

●発表会に向けた準備(1) おもに授業内	指導担当教員			学 生
	山岸	川畑	迫田	
・全体統括・コンセプトの確認	◎	○	○	全 員
・楽曲の選定	◎			全 員
・楽譜の作成・編曲・印刷	◎			
・各楽曲の練習	◎	○	○	全 員
・ステージの流れの確認・台本の作製	◎	○	○	企画係 + 全員
・配役の決定	◎	○	○	全 員
・演技の練習(せりふ・動き)	○	○	◎	企画係 + 全員
・衣装の製作	○	◎	◎	企画係 + 全員
・舞台用品の製作(小道具・飾り付け等)	○	◎	◎	企画係 + 全員
・配布用手作り楽器製作	◎	○	○	企画係 + 全員
・ポスターの製作	◎			担当者
●発表会に向けた準備(2) おもに授業外	指導担当教員			学 生
	山岸	川畑	迫田	
・計画書・稟議書の作成(予算案他)	◎	○	○	
・物品購入	◎	○		企画係 + 全員
・観客の勧誘・対外的交渉(渉外)	◎	○	○	企画係 + 全員
大阪市・阿倍野区関係	○	◎		
地元小学校への訪問	◎			
在学生・卒業生への連絡	◎	○	○	(全 員)
高校生への紹介	◎	○	○	(全 員)
・音プロ1年生との連絡・連携	◎	◎		全 員

8. 発表会についてのまとめ

本稿執筆時点においては、すでに平成26年度と平成27年度の2回の発表会を開催している。それらについて、おもに同学科内の他の教員からの感想などに基づき以下のようにまとめる。

(以下、寄せられたおもな感想の要約)

- ・親子連れの来場者が多く、こども向けのプログラムが概ね適切だった。一方で、選曲については、やや女の子向けの内容のものが多かった。

- ・舞台の照明が暗かった。→これは、第1回発表会における反省点で、平成27年度の第2回発表会においては照明方法を見直し、改善を図った。
- ・来場者数は、150名～160名くらい。(受付担当者からの報告による)
- ・子どもと一緒にダンスをできる選曲など、さらなる工夫が必要である。
- ・同じ地域で開催される別の催しと日時が重なった。

9. 受講学生の感想（主な内容の要約）

- ・「幼児音楽系プログラム」を選択して良かった。他の学生と合わせてアンサンブルをすることができて楽しく有意義だった。
- ・音楽の楽しさ実感できた。その経験を保育者になって生かしてゆきたい。
- ・長時間かけて、歌や合奏、演技などを練習したが終わった時に達成感があった。
- ・発表会を終えて「音楽っていいな」と改めて思った。
- ・反省点も多くあった。秋の保育実習直後は、体調を崩して大変だった。
- ・練習時間をできるだけ有効に要領よく使うことが大切だと感じた。

10. 今後の展望と課題

「保育所保育指針」においては「『音楽』という特定の手法よりも様々な方法を混在させて表現を楽しむとことを重要視している」と考える(注6)。また、「幼稚園教育要領」においても「音楽表現に関わる内容は、『音楽』という特定の活動ではなく『表現』の中に位置付けられていることも、指針と同様である」(注7)。と書かれており、どちらも音楽の活動を「表現」との言葉でとらえている。

上述のような観点からも、本学「幼児音楽系プログラム」での発表会のように単に演奏を並べるだけでなく、全体をドラマ化し、ストーリーでつなぐ方法は、「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」の目指す方向とも一致していると考えられる。

「幼児音楽系プログラム」の教育活動が開始してから4年目となった現在、いままでの蓄積とさらなる改善を続けることにより、ようやく少しずつ定着しつつある段階であると考えられる。さらなる発展のために、以下の点を今後の課題と考える。

<教育内容>

学生のニーズとともに当プログラムでの音楽体験が将来現場に出た時に役立つようにとの観点から、教育内容についてさらに改善していく必要があると考える。まず当面の課題として、合奏楽譜の編曲方法についての基礎的知識と技能を指導する時間を確保したい。また、具体的な楽曲への学生の指向は年月に伴って次第に変化してゆくものであり、取り扱う楽曲の選定については、今後も学生の指向を可能な限り生かして取り組んでゆきたい

と考えている。

<地域社会との連携>

地元地域、阿倍野区や大阪市などとの連携が必要である。この点についても、さらなる広がりを目指してゆきたいと考えている。

注

1. 本学『要覧』（平成 28 年度）41 頁
2. 本学『学生募集要項』（平成 26 年度版、平成 27 年度版、平成 28 年度版）による。
3. 本学『要覧』（平成 28 年度）47 頁
4. 本学『学科目概要』（平成 28 年度）45 頁、89 頁、90 頁
5. 上掲書 45 頁、89 頁、90 頁
6. 松本晴子『『保育所保育指針』と『幼稚園教育要領』にみる表現（音楽）の考察』
宮城学院大学発達科学研究（宮城学院大学附属発達科学研究所）、No.10 2010 年 10 頁
7. 上掲論文 13 頁

資料 1：「幼児音楽系プログラム」発表会のフライヤー

第 1 回 平成 26 年 12 月 6 日/大阪キリスト教短期大学講堂

第 2 回 平成 27 年 12 月 19 日/大阪キリスト教短期大学講堂



楽譜資料1：編曲合奏譜の一例：「山の音楽家」

1

ピアノ、フルート、クラリネット(2)、トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、
打楽器類、鍵盤ハーモニカの各楽器群が順次登場する。

楽譜作成にあたっては、楽譜作成ソフト finale 2012 for Mac を使用した。

編曲：山岸 徹

<前奏>

The musical score is written in 2/4 time and B-flat major. It features a piano accompaniment and a flute part. The piano part begins with a *mf* dynamic, followed by a *mp* section, and ends with a *mf* section. The flute part enters at measure 12 with a *mf* dynamic, playing a melodic line that is repeated twice. The piano part continues to play a steady accompaniment. The score is divided into four systems, each starting with a double bar line (//). The first system covers measures 1-11, the second covers measures 12-18, the third covers measures 19-22, and the fourth covers measures 23-26. The flute part has two first endings (上段: 2回目) and one second ending (下段: 1回目). The piano part has two first endings (1) and one second ending (2).

30 3 2

Fl. *mf* *tr*

2 Cls.

ピアノ

//

34 2

Fl.

2 Cls.

Tp.

Tb.

Euph.

ピアノ

//

41 4 1

Fl. *tr*

2 Cls.

Tp.

Tb.

Euph.

ピアノ

45 2

Fl. *mf* *mp* *mf*

2 Cls. *mf*

Tp.

Tb.

Euph.

カスタ
タンプ

スズ
トライ

ピアノ

// 5

Fl. 1 2

2 Cls.

Tp.

Tb.

Euph.

カスタ
タンプ

スズ
トライ

鍵ハモ

ピアノ

57 6 4

Fl.
2 Cls.
Tp.
Tb.
Euph.
カ斯塔
タンプ
スズ
トライ
鍵ハモ
ピアノ

66

Fl.
2 Cls.
Tp.
Tb.
Euph.
カ斯塔
タンプ
スズ
トライ
鍵ハモ
ピアノ